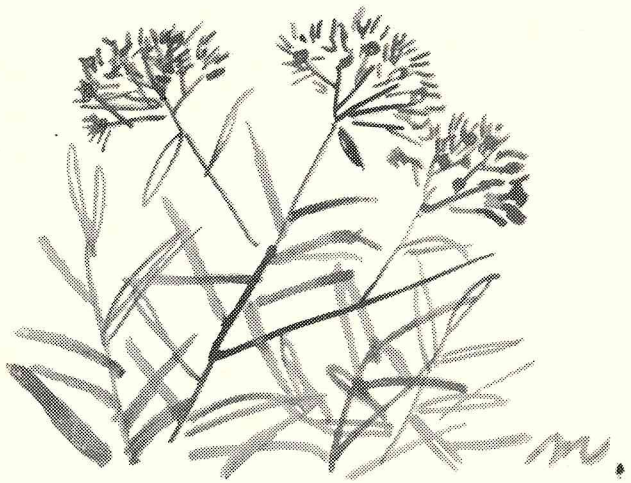
花影

11

1964

花　影　第３種郵便物認可
昭和39年11月１日印刷　11月５日発行　第４巻　第11号　毎月１回　５日発行



花影　昭和三十九年十一月号　目次

積日荘劄記……前川佐美雄（3）
―秋になると―

作品Ⅰ……宮崎智恵　大伴道子　荘雪子（4）
高橋蕉雨　柳瀬丈子　中川三津子
森重杏代子　横山憲一郎　山本百合花
中市弘　加藤正民

「風祭」の著者……田中克巳（14）
花影集……新田ミツ　秋葉ふじ　後藤ふみ子（16）
田島陸子　中島輝子　坂田陽江
永野忠司　服部はつ　草南子
栗原義子　田中とみ江　福原花子
尾崎史枝　佐藤正子　塩島美雪
佐藤よしえ　川田柳子　大森春子
吉田とよ子　高橋和子　室岡まさ
平畠芳枝　井上イツ　深山富世
野原清子　泉鏡子　南京子
塩井ひさ　小山摂子　神野美江
原田弘子　早川静子

堀さんの手紙……水野あづさ　浅井初江　中市弘（21）
作品Ⅱ……平山掬美　豊田智恵子　工藤浩子（28）
守口忠夫　小原浪子　佐藤のぶ
渡辺久子　植田道子　綿津和枝
辻林美代子
朝倉綾子（37）
予感……宮崎智恵（38）
選歌のあとに……宮崎智恵（40）
編集後記……

表紙　勝本富士雄　**カット**　勝本富士雄・大伴道子

積日荘劄記

―秋になると―

前川佐美雄

大分以前の話だが、父の法事か何かで帰郷した時のことである。「あんたは絵かきになつたはるのかと思つたら、歌をうたはるさうだんな」といふ人があつた。すると、或る年寄の百姓が、「そんなら一つ歌うて聴かしとくなはれ」と言ひ出した「その歌と歌が違ふがな」といふ人もあつたけれど、私は、座興の為に誰でも知つてゐる流行歌の一つを歌つたところ、「あんまり上手とちがひまんな」とその年寄が言つたので、皆んな大笑したことであつた。

子供の時分は、もちろん、私は歌よみになんかなる積りは少しもなかつた。ただ何となくいつの間にかさういふ具合になりはじめ、今ではもう一生涯これをやるより他に仕方がないといふ年齢にまで来てしまつた。今更歌以外の何をやるといふ法もないのだから、私の生涯は歌よみとして終るだらうことは明らかである。たかが三十一文字である。つまらぬ事に尊い生涯を賭けたものだと後悔しても、もはやどう仕様もないわけである。だから、私の所へ歌を見て貰ひに来る若い人が「わたしは一生歌を作るつもりです」と堅い決心を述べても、「はあさうですか」と応へるだけだし、さうして初めから大した覚悟を言ふ人に限つて大抵半年か一年のうちにさつさと歌をやめてしまふから、私は気が楽でよい。

少年の頃の私は、絵かきになりたいといふのが最大の希望であつた。そのころ、子供のくせに、油絵などを描いてゐた者は、大和全体を探しても恐らく五人とはなかつた筈である。今は奈良の町にさへ油絵道具の専門店があるけれども、その頃は、大阪に一軒（それも和製の絵具しかなかつた）と京都に一軒と、それもあまり大した店ではなくて、必要なものは東京神田の文房堂まで直接に注文して取り寄せなければならなかつた時代だし、たまに奈良まで来て公園で写生してゐると、「ようまた看板描きが来とる」といつて人力車夫に取り囲まれたりしたものである。毎日カンヴァスを持つて写生に出掛ける私の姿を見知つてゐた村人は、将来絵かきになるものと思ひ込んだのも、甚だ無理からぬ次第であつた。

それが、絵かきにならず、また他の何ものにもならず、たつた三十文字を操るといふ破目に立ち到つたのだから、人生はやはり不可思議である。

何故絵をやめたか、といふことの説明は省略するが、子供の時にやりたいと思つたことを一生やり通せたら、これほど幸福な人生はないのではあるまいか。大抵は子供の時の希望に反して、異なつた道を歩くようになりがちだし、それがまた人生の常なのかも知れない。けれども、萩の花が咲きはじめ、雲が段々白くなり、空が深く澄んでくると、子供の頃と同じやうに美術シーズンとなる。即ち、秋になると私の心はそはそはとして落ちつかない。それは、まさに少年の頃、絵かきを志望してゐた時の心と全く同じなのだ。齢を加へても人間の心は余り大きくは変らぬものであるらしい。私は自分の心を制しながら、この秋もまた、何食はぬ顔をしながら、いろいろの展覧会を見て回ることだらう。

「風祭」の著者

田中克巳

いまは昔、昭和十四年ごろから新橋の大阪ビルに「ぐろりあ・そさえて」といふ出版社があつた。社主は神戸出身の実業家で、愛書家としても知られてゐた。戦後その蒐集のブレークなどの稀覯書の売立てがあるのを見たから、今はもう亡い人であらう。この出版社は日本浪曼派、コギトの作家たちの本ばかり出して新ぐろりあ叢書と名づけた。保田与重郎の「エルテルは何故死んだか」伊藤佐喜雄の「花の宴」前川佐美雄先生の歌集「くれなゐ」などをはじめとして中谷、外村、浅野などわたしたちの親しい人の本を続々と出した。歌集ではもう一つ斎藤史さんの「魚歌」が出たと思ふ。この変った出版社に中ごろ入社して来た絣か、銘仙か、渋い着物姿で編集してゐるのが宮崎智恵さんといつて、石見津和野の出身といふ。歌を作るとは紹介されもしなかつたやうに思ふ。わたしは尊敬する鷗外先生と同郷ときいて、話しかけるのが、はかばかしい返事もしてもらへないので、嫌はれたなと思つてゐた。

今度いただいた(といつても二年前のことになるが)歌集「風祭」によると、これは第二歌集で戦中・戦後の作はすでに「花泉」といふ歌集になつてゐる由、ものおぼえの悪いわたしにはどうも覚えがない。これは新ぐろりあ叢書には入らなかつたが、同じ出版社から民俗学の本を出された、早川孝太郎氏と結婚のことは風の便りにきき、死に別れられたことは、わたしが奈良女子大に通つてゐた時、いつも帰りに寄つた前川邸で先生から承つた。

「風祭」はその前後からはじまる十年間の歌の集である。

ひとつ蝶よぎりてゆきし窓の外うらとふことのありしごとくに

巻頭の第一首である。うらはトひか、なるほど民俗学者(早川さんが柳田国男・折口信夫・渋沢敬三などの諸先生につぐその道の高名な人であつたことは、不学にして最近知つた)の妻らしいなと思ふ。それにしても双蝶でなく「ひとつ蝶」といふところに何か予感があるのか、わたしは二十五年たつたいまひとつ蝶だつた出版社の乙女を想ふのである。

追ひつけぬもの追ひゆけば木蓮の花のしげみにかくれたる蝶

ここの蝶はロマン派の「青い花」であらう。それにしても現実的な女人に追ひつけぬものを追ふ執念のあることを、わたしはおどろき感心する。

華麗なれと我はつぶやく店に佇ちて目立たぬ布を選びもちつつ

「めだたぬ布を選」ぶところむかしの智恵さんではないか。しかしとりあげてかう歌ふところは稀有の歌柄だと思ふ。

足らへるを禍事(まがごと)くると信じゐるわがまづしさの性となりゆく

これも津和野のしつけであらう。世をあげて充足を願ふ中に足らはぬことを願つてゐるのである。

このやうに愉しい場所のありしかと子の机辺に来て物書けり

この歌は人をなごませる。最上の場所が坊やの机で、最上の楽しみが書くことだと思はせる。

紅ばらを子と写しをりはみいだしよごれし子らの紅ばらぞよき

子らの丈まだひくければわが目路の光の位置にとどき難かり

子らへの愛情は読者をなごませるが、この清らかな、低姿勢の愛情の表現は当世のPTA族のとは類を異にする。

つきつめて思ふ勿れとさとされぬつきつめてせし事ばかりなる

わが思ひ断ちて刻みて煮くたせしもの食うべをり夫も子も我も

御主人もかう歌はれてゐる。学者としての妻にふさはしいといはばいへ、わたしはあまりにも専心的な妻をさとす夫をうらやましくも、美しくも思ふ。

逝きし子がとり落したる木米の白き茶盌の罅濃くなりぬ

宮崎さんも子供を亡くされたのか、その悲しみは同じであれ、わたしはかう歌はなかつた。なに、とがめてゐるのではない、この表現があつたかと、目を見はるのである。

夫の部屋の煙草のにほひうすれゆき遂ににほはずなりにけるかも

絶唱である。

君が挿してゆきたる柳芽ぶきくる春くるたびのかなしみならむ

むらさき濃き花菖蒲いけて朝より夜ひとりといふは痛みに似たる

あれは何と問ふ人なけれうつむきて土より秋を感じゐるなり

下ばかり見て歩きをれば靴とズボンみな夫に見ゆゆき過ぎにけり

民俗学者としての早川先生のことは、また書くこともあらう。智恵女史の夫として、これらの歌をなさしめた先生、三河の花祭といふ特殊な民俗をわれらに教へたまうたひとが、純粋に夫として、亡きひととして、かなしく正確に歌はれてゐる。「云はぬは云ふにまさる」といふことわざがあるが、云はれるわれらにはつらい歌である。言葉でなぐさめないで来た十年近くをわびて、この稿を終る。

あまのはらふりさけ見れどゆきしひとはるかに遠くなりにけるかも

早川先生追悼を一首をささげる。死者よ享けたまへ。

編集後記

日のたつことの早いのに驚きます。秋はことにいそがしく冬に移っていくようです。

オリンピックも終りました。なんとかすれば手に入ったはずのキップも、最初からさっぱりとあきらめていましたが、いざ開会式という時になって急にいってみたくなりましたが、十月七日にさっさと羽田からフランスに飛び立ってゆかれた大伴道子さんのような人もあるのだからと、再びあきらめることにしました。それでも閉会式には、わざわざ山口の姉がとどけてくれた入場券で、しばらく競技場のスタンドに坐ってきました。一族を代表して見てきた私の「よかった」という一言でわが家の青年達も満足の面持でした。

田中克巳先生が、『道』につづけて『風祭』の批評をおかき下さるという、ずっと前の約束をお忘れなくおとどけ下さいましたので、有難く掲載いたしました。

この年の最終号でめんどうなことは言いたくないので、今号でいろいろと言っておきたいと思います。面倒の第一は会費のことですが、皆様のご協力でたいへん順調にはこんでおります。なお未払いの方や、全々払込んでない方もあります。雑誌不用の方には発送を中止したいと思いますから、お手数でもごれんらく頂きたく、よろしくお願いします。

特におさそいかけはしなかった〝花影〟もいつのまにか会員の数も増加いたしました。同人、会員の別も、今ははっきりさせてもおかしくないと思われますので、今後それを決めていきたいと思います。同人の作品はⅠに会員は花影集にその月の秀作を作品Ⅱに入れていきます。同人の方は作品の上で大いにご努力いただきたく、会員の方も作品のむらがなくなりましたら逐次同人として活躍していただきます。

よい作品に次いで会費の各自ふたんも小さい同人誌ではゆるがせに出来ませんので、その点でも皆様のご理解を希望しておきます。

十二月号は早めに編集を終りたいと思います。つづいて新年号ですが、年末は印刷所がこみますから、特に期日どおりにお願いします。新年号原稿締切は、五日到着までとします。歌会会場は十一月から西武生活クラブ室に変ります。

宮崎　智恵

「花影」規約抄

一、「花影」はどなたでも入れます。入会金不用です。
一、歌会は毎月第三日曜日午後一時—四時
　会場は池袋西武百貨店七階
　西武生活クラブ室
一、会費三ヵ月分三百円を納めて下さい。
一、同人は一ヵ月二百円以上とします。
一、入会の手続、会費の納入、通信、送稿などは発行所あてにして下さい。
一、文章原稿は大判四百字詰原稿用紙を使用
　随筆の場合は三枚半または七枚にまとめて下さい。
　詠草は、かならず「花影」規定の用紙を使用のこと。
一、添削希望の方は二百円封入の上左記選者あて直送して下さい。
　宮崎智恵　武蔵野市西久保三ノ六五
　大伴道子　港区麻布広尾町三　堤方

花影11月号 第4巻 第11号

昭和39年11月1日 印刷
昭和39年11月5日 発行

編集兼発行人　宮崎智恵
印刷所　(有)白馬印刷所
豊島区池袋2—931
発行所武蔵野市西久保3-65
宮崎智恵方　花影発行所
頒価　100円　〒6円

月号歌稿

—締切毎月五日厳守—

詠草この用紙を使用文字は旧かな楷書で正しく・一首二十七字内

《送付先》　武蔵野市西久保三の六五　宮崎智恵方　花影発行所

氏名